



徳富の物語





雲出るや徳屋の落所刈割りとて解白  
 住昔松尾芭蕉翁乃淨射山より詠れ  
 ち敷るり去年を彼翁此段後二百餘年  
 考ふるを以て其の古き志を魚字子字り  
 傳へるは此山を参りて道志多へともるれ  
 かやて遠近人能く後あはれとらおぼし  
 悉く石ふ勒しと和田の嶺路に傍し

建ふ心と誓かんとをたふあひあ田ん  
云々無き子能く考へて居てゆへ  
ふ百韻の教に満ちるを志し清き心  
く靈樂をたらし連歌乃を安んずん  
たれる散句やもふ坂本にまけり  
事小其きは風雅士に願ふむ  
は一古せよといふれたまは人  
道なき心志に厚きを思ふは  
清野山神教

事執りてはせむる身よき  
拙まをいふ心て誓ひり  
事よりかゝる言をたふ  
よかあつかひたよ  
誓き能く初む人の  
あ

明治廿七年四月二十日

小井園主人 岩本岩常

乙未夏日  
光緒



明治廿七年四月廿日下瀨訪於慈雲寺  
芭蕉翁二百年忌追善會興行

眼起俳諧之連歌

雪ちる平極厚の芒の刈

祖翁

漁てらやさうう記水音

正偏

朝まき枝曳乃の静さふ

紫翠

火のともくくと燃てるをあり

其梅

殺竹を米ねあとの削り屑

五芳

出代さふりも月せはけらく

松原

。雪ちるもあつらひ月せはけらく

魯山

あふうつらき極辺の中  
所階いつくんで控る唐もあ  
あゝる晴くうりくひの朝日  
うちとけさつき小灘も知ぬ紅  
骨牌にひも意のあつたあ  
羅のまははそまにちやり深  
不作ましく伸るなぬこ七  
あふく〜と隣らき寺をここ  
甲舎ひらつれぬぬ 奴さぬ

梅 屋  
柳 月  
洒 落  
入 家  
義 窓  
空 谷  
如 筆  
江 柝  
層 氷

以上を析

○ 新緑のあまうらひふあり〜月  
あふハヤの字虫もいらく  
秋寂のあつさうりあま下〜ま  
破き屋のかげあひ〜ま  
△ 美を〜つらふふ花のまも満て  
あまの〜ま〜あ〜かふる  
二 赤酒小瓶〜吐くもひを笑ひ  
崎の唯のま〜わけぬ伝舟  
中〜小幾の内の清供客

龍 湖  
明 都  
明 京  
撥 登  
其 孫  
一 翠  
松 岩  
其 友  
是 村

二

素平のそとあれの何れを  
行のそと中からむきくす末  
たうつやうさう専のそ  
中分に投羅の治の利ぬあり  
折し柳の神うふあり朝  
つたひしまとうわてん右のそ  
守かすりしに多まいる年  
青のの鶴を折しる古中  
。岸のそと小渚あつる月

津 口  
代 文  
芒 湖  
水 湖  
梅 窓  
松 眠  
玉 湖  
自 楽  
松 年

三

弱冠のきれてあつて種  
そとろにさきま本質ありり  
の<sup>ニウ</sup>かきあて膏薬つくる程つれ  
海の一ふさうに忘れぬ  
捨られぬもそつとくふあり  
えんものいしぬあつ品の高し  
強さう末所地獄の焼かけん  
帰女の果とんこんぬやうさ  
つ鏡おもひしすれまのそとくすま

凍 湖  
明 丑  
暮 盡  
芳 五  
湖 山  
芒 海  
一 葉  
那 香  
鏡 世





湖邊  
 相陰  
 志未高  
 依山  
 一峰  
 梅  
 水  
 石  
 可矣  
 依  
 芝  
 居  
 の  
 は  
 ら  
 む  
 軍  
 糧

船  
 葉  
 子  
 も  
 た  
 一  
 脊  
 反  
 の  
 艘  
 世  
 帯  
 志  
 定  
 錦  
 と  
 ら  
 陣  
 て  
 来  
 運  
 味  
 香  
 法  
 水  
 の  
 よ  
 ふ  
 船  
 の  
 月  
 音  
 香  
 未  
 城  
 の  
 系  
 の  
 ち  
 う  
 つ  
 う  
 つ  
 かつ  
 と  
 又  
 葉  
 の  
 お  
 り  
 ま  
 じ  
 居  
 里  
 出  
 て  
 せ  
 び  
 り  
 園  
 硝  
 子  
 ふ  
 申  
 り  
 梅  
 の  
 名  
 の  
 池  
 西  
 日  
 長  
 閑  
 ふ  
 あ  
 の  
 ぬ  
 さ  
 ら  
 名  
 及  
 す  
 可  
 能  
 風  
 を  
 ふ  
 う  
 せ  
 流  
 是

ひらげとそあり人鬼のあり  
 官小住崎をありの松村  
 菜ハみんね木の根その根  
 と張をふの通つて残つてみ  
 懐く呉氏士のつる鼻 彦  
 焼香の来と乍らりに海をあり  
 筒小町あり橋 山 菜 菜  
 黛をいれてありへい 菜 菜 菜  
 くらきしをよとよ菜はらのま

芒池 蕉亭 芒峨 舟 為玉 月松 笑合 田大 抱湖

高園のば 子 子 子 子 子  
 氏子仲万のほらの官  
 田も畑も申をあり月の村  
 川ととれと味のよき 蟹  
 ちつそりと後の餅をさくおま  
 古もそても様ハ 本 陣  
 孫とつた重芝の木のひと抱へ  
 奇しつた子ハ理の外ふある  
 風子このせきふ右うらまの旅

四好 菊玉 令梳 之 似 水 小 湖 一 子 梅 居



百韻満尾

た〜と〜とを近の山  
<sup>香</sup>芳を〜さる有栲の上の系  
 酒戴工り〜る其め目

満川  
 香底  
 酒栞

中こちらぬ茶や月さへ十日日  
 花はやまの修り姫の織室中  
 柴刈もも目らう紫ふ孫のけり  
 空屏のうけまをまゝり姫の天  
 そら表澄世つるふ扇の那  
 大川へ出さうり田植の濁り水  
 顔面のすゝりや棒ふ志まの義  
 學の生らるやまも、底まゝい  
 神祇のあゝりすゝり市の塵

酒京

大政

仔細

左張

柳 春 楓 城 浮 空 南 野 似 水 弓 篠 耕 雨 果 想 羽 海

長生  
 花家  
 花丸  
 花  
 花

金枕



あゝ川の音を押しつゝ露の那  
 月影のまれいうくまよはれの花  
 植木も梅もあつらひぬのうら  
 船もふとそめたるおきまの  
 春園もあつらひぬのうら  
 尊おつゝもえのきりも明り  
 うやゝ牡丹もあつらひぬのうら  
 行末や梅のまゝり梅ほのめうら  
 雲はあれきり月影もあつらひぬ

尾張

二河

きり

澁河

車 友  
 岸 度  
 素 師  
 蓮 宇  
 石 芝  
 十 湖  
 木 洞  
 九 城  
 増 寺

先へ来たて居るつゝありぬの花  
 又うらあつらひつゝあつらひ夕柳  
 近う来たて居るつゝあつらひ  
 舟もあつらひつゝあつらひ  
 中へ来たて居るつゝあつらひ  
 唐の世のちりもあつらひ  
 らんまうけの思ひや梅もあつらひ  
 船もあつらひつゝあつらひ  
 雲もあつらひつゝあつらひ

甲斐

信豆

相模

東京

学 園  
 舟 島  
 連 水  
 宇 山  
 舟 磯  
 舟 香  
 素 水  
 舟 文  
 唐 翠

み字ふさくらゆる春や有来の春  
とめ巻の巻のもえや初明り  
稲穂の眼ま河の氷の那  
伸しけふふもちちらね和歌  
名をさして待人もなす枝の音  
春ふ融て肉も融るう春の上  
夕立のきりりさくらさきりね  
朝戸虫のきりりさくらさきりね  
若松の折れは白き葉をさかす

下総 旭高  
常陸 常陸  
近江 九  
美濃 所  
上野 葉古  
乙 瓢

大木の梅を咲せてむらり家  
花はゆか 花のへきさ自由遊  
廣ひとくさぬまほや様の家  
春の水曲してふらりりり  
景煙りの籠てもうさく柳か  
よい時ふさる春の来り更衣  
出てらんたうなまら自然の子の日か  
挿流ふさくらのさやあつ雲  
二三枚蒲葉もつむ花をの春

陸前 江二  
備中 浦山  
羽前 浦山  
羽後 浦山  
岩代 月静  
加賀 浦山

暑候もつよの音より 梅の影  
大幣ふさのる 軽や梅の風  
けさ伸さやうれつ月や牡鹿  
懐かやかすい水と浴ふゆ  
飛倦て越もな 鈴子も  
やき枝の蓄もた 梅の糸  
すそめやんそめや梅子明花  
那海菜の料 理ふしは梅の花  
走り出てふをのみや鈴の鈴子

能登 賢外  
飛彦  
木南  
晴雲  
鳥牙  
赤梅  
曲川  
笠野  
流花

掃うせて木柙居る 梅の那  
幾ふ代と振ふひ 月のそ枝のそ  
花ふ月空ふ空ふ 花とありぬ  
掃よせて梅の影 梅の塵  
おふ入を吹か 梅の影の梅あり  
おけ香か扇の風 花ちるあり  
起つとき 用のな 雲の影  
はつ 小蹄のあや 花すくれ  
泉の松小雛もや 花のふつ

長門 小梅  
備前 晴月  
備中 春風  
能登 其楽  
能登 其夫  
阿波 逸外  
如彦

蓬草也松をこころの金屋伊  
 永りある日の落つるや 龍 景  
 門松やお生たうし思 赤のたうま  
 梢雪の残るるや 柳 月  
 山寺の鐘教たうしを 華り  
 忌たうしは 接たうしは 木 花  
 静るは代のものあり 神 籠  
 茶小内うかれしもの 茶 也 花  
 隠れあやうんかーのせぬ 梅 磨  
 信濃 雲 光

花をぬらうものふ 柳 柳  
 皆有伊ふさうて 梅 越 け 下 一 花  
 雪りしたるんたう 昔そ 茶 の 籠  
 雪はふ松の葉 けり 小 の 月  
 景 冬 對 山

伊那郡

振向丁さう 龍 み 柳 柳 柳  
 向ありふ 落 茶 の 味 茶 茶 の 夕  
 照り 續 け 日 に 夕 立 の ぶ ぶ 柳  
 時 雪 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳  
 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳



我一人清れくちりきふさの時や  
人よけて通はる人きき道の  
骨や見ふ水のたるふや  
とよまふつゝなるきや神  
日のあつゝまをいぢく蝶つ

誦詩歌と詠話所

三 中  
眉 明  
梅 乙  
一 翁  
鳳 依

幾つしき言ふまゝにきき  
我も歌をよめるから  
船頭いふのよもいふ  
平の板

芝 村  
芝 比  
是 夫

翁の目いふばの海をも押さ  
肉のき消さやまう  
歌をよけしめ  
蝶つげと傳へ来ふり  
肉小部  
一やふふ二座まう  
葉の酒さうの肴て  
おの蝶遠ふ子に  
そねん炭の焼うつ

芝 海  
如 山  
用 休  
衣 乐  
衣 乐  
若 舟  
東 子  
芒 園  
芒 娥

時やいやはしらの足に伴がうの空  
毛居  
今一國と通念の上の空とさうね  
毛軒

永明村

所好もや神垣のしみよきま  
長碧  
新葉もや久法殿のみやふた  
玉水  
海苔濱や碇のきよみおのり  
一樹  
昔持てみ。碑やまのり茶  
其石  
山葉のふふそらにひらき日神が  
鬼岳  
時やいやはしらの足に伴がうの空  
凍湖

十二

竹岩せん七日の茶花の目守  
小仙

糸川村

寂寂中や斜ふ日のあし  
文朝  
藪又やまのりとの足と控ゆる  
若外  
紫うらふあし顔もせぬ踊るね  
山采  
大地のやまのり控るもひの茶  
晴里  
殊りあ。まのりね。木不二の山  
一庭  
旁雨や壁ふす白あ。らんは  
洞月  
狭のるるとのねあり 牡 糸  
氏守

げいの藤こねよふれ梅 柳 古入  
鳩鳩の入りり出るる自の暈 晴山  
角力とる力も思ふに近ひ陸 英山  
地界とる年ふり業や不存の茶 英倉  
茶ふさく園子さうらへ波留れ 田大

湘東村

ハ翔やのぬり水思やの程の中 一志  
雲の暮りてあうたさる日おれが 花秋  
ひよさうあうりさ田畑やきの峰 水音

十四

眠以眼をふくれふあつりそこの風 四好  
不慮ふ船むりそ料理や沖鯨 對島

孝子村

傍りさつこのぬきさうり蓮の花 抱畑

玉川村

そよふのちや那ふ入山小人 曾乐  
子種の神とまよふや福壽州 三郎  
松の張とやう那石より昔の茶 古井  
まきらんう順ふ起して着衣始 梅寮

奈のちの樹をふれにみりしを  
月をうつしてしよさしぬきり時を  
あれりこれ松つゝもいづれやその葉

松山  
万玉  
明京

原村

常雨のそつてや月や麻のそつ  
負取れ地と名をれす藤のそ  
際白中やゆふ深きそ松の上  
中より碓の足とありり松子のそ

楚山  
一角  
自松  
泉跡

本郷村

十五

欠塚をくちく弱や弓をきめ  
掃除しこれの上やを山層  
松あつてそつり松きた返さき  
里の名いびりしきりありて東  
字ありのかけりもさきつてまが

松高  
松内  
池庵  
樟高  
寒月

原宿村

あつて葉のたも伸りきりしを

雪舟

有法村

そまじや松のそつちきりしを

乙二

狭りれと這る子いあ——榎の内  
あ——この灯のかけあつたあめ内園  
榎啼やまこ善道いこらぬうあ  
雪のぬきるの身いありりり  
ませぬまやうあふありて産の跡  
こふ海ふれ——雪の海跡  
山焼と見つゝ流きや炭こ——  
茶燗りの梅ふとくや利久盡

宮川村

葉香  
あ  
一 葦  
松 花  
可 花  
休 男  
一 五  
明 哉

蕨への用ををまふれと風情の如  
二本とらぬ葉屋ふ字の——柳か  
けよまのかられて仕舞おひの如  
是をまてし子をあひひりけ平持

中河村

矢のぬきる内目よもこのぬきあ  
梅檀のこふともう柳 葉の産  
飯とつたやこせむらあきりりあ  
小春ふもふらありのぬきあ

依 山  
唯 一  
梅 花  
笠 様

菊の香も小松曳子のゆきも  
小松の香も小松曳子のゆきも  
春風も不酒目ありを  
窓仏と茶で暖きなりをの梅  
熊籠てゑ己人通る海を  
暮の日や茶の窓もあはれを  
新へるを話さるる吹雪も  
夕ひとつと輝くともぬ暑も  
あつらまけ茶の煙や終りの

又子  
松花  
茶丸  
宋安  
松花  
今昔  
静友  
一葉  
其語

梅唐世をともあはれ  
片つと田へおののま  
了の背も味くら  
山園も似合ぬ  
ひる影もあはれ  
暮風もあはれ  
伸るるおののま

鶴年  
志法  
為水  
芳自  
一  
而丘  
松年

湖南村

眼もつとやをこゝろの席の角力

湖山

菊作る及くも長て梅のま  
接はやく人の形こそあまや  
書きくさくさの心を残さるり

香田村

花又  
露峰  
蔭莊

この草子の跡りて折ぬ是の部  
株上の或いささくも自れ  
まのにおや人を思ひて人の事  
とをを思や昔を思ふこの思ふん  
暮てまは行何きも人それの心

湖色  
ひら  
雲松  
買竹  
春浦

越てけ崎こらてみるなよあま  
空とけや空を流る川の音  
ありのよりのことを思やち用子  
糸糸糸のそめくさめりり  
くさくさくさあふ川流たされり  
ふりまきく角力をくよのちを  
空の火燃さくさく日

濱村

春自  
梅跡  
逸梅  
松曉  
茶山  
野水  
松眠

まゆめや冬を思ふのよめ眼と涙

水湖

あつらりと〜料理あり酒のを  
舟のひる舟日も思ふや 村町  
素拙 芳里

春五連

う川よりとほりあふむ 庭葉が  
舟のつらとふ思われを 枯屋を  
船室や軽巾ききき 板たみ  
うりか〜むか〜あ〜や夕時  
あ〜唐の巻ふ勇む 羽音か  
積積や客もま〜むま〜あ  
可矣 玉天 江柳 一季 水亭

眼みく不慮耳ふ松花を 左 酒落

川卷村

権よりもう川子の拵ふ 踊り船  
埜埜の勢ひつるえて 夕日 和 梅溪

平野村

風もきき破磨矢の力ひききりり  
松を〜ねふ音何る 花菜うね  
蝶々の幾羽も産と〜 牡丹うふ  
昨〜ふらの殖えりり 穂原ふふ  
代 如 翠

春窓

松嶺

如翠

代



岩原の馬ふこゝ通ふ栞野が  
 留まゝのむ隣のをく栞の花  
 神柱やあゝ水音 ねの音  
 ちゝ茶もふまねをや 神の栞  
 蚊虫の尻ふさへひまゝのうりり  
 温泉のたやあゝ 見まゝ茶室の茶  
 ひとね味をくられて 空の影茶が  
 ちゝめゝく大盃や 玉子酒  
 ぞふ茶のたけ てもあゝや 栞の茶  
 栞野  
 栞交  
 栞扇  
 空水  
 栞官  
 一池  
 一升  
 空道

二階めくまの鶴のそまや ぬ栞  
 ちゝあふ青心栞の目数ゝ那  
 涼しさをねらあゝても 湖の音  
 春うゝにふつゝむまゝは水が  
 啼 ちゝめゝのすまや 年の雲  
 ちゝあふてりてれい栞のまゝ那  
 長茶のふま 進むちの 健茶が  
 思まゝのまゝふま ねのそ  
 活茶のふまかえたり 白のまゝの  
 一 栞  
 一 席  
 一 仙  
 一 人  
 一 湖  
 一 水  
 一 砂  
 一 也

美一まりのや夕日の信也一  
人夢のやむ時なるの根明り  
提灯をさして路もや 夷 漢  
見かたれい足跡にもあきさるる  
舟の舟小乳児を託けし碇が  
子もくつあやまをくにみゆる  
旅もふよまの日の近一二日冬  
頼扶ふつゝ中身の長果の形

長地村

松陰 林入 梅人 玉湖 みま女 松舟 入家 桐陰

雪やまの後のぬきたさ  
煙掃や露見空てひと笑ひ  
蝶飛や舟舟小乾く 際  
盆を法門ともてしに踊り  
雪子啼も来さうねるや梅嶺  
申き中めを月のあてある芒のね  
吹まのうらみあそり一和田崎  
ひと心あふまのちてき一雪のた

中飯宿所

都妻 常盤 可仙 三四 満川 鏡岱 遊人 如佛

子を道と扱ひたりや、兼松分  
版の香のころひ、ひとるや夕時お  
踏しきめの勢や、嫁の君  
行きたよと、老とあるや雪のた  
雪解や、けあよて踏たもあ  
雪車川のよふ油断いあやうり  
若いとよ二度とあはれと、踊る  
翁忌や、たれも雪の降くあり  
古子の寝食ともや、降り花

者 希 水 層 水 子 芳 雪 侯 其 水 末 水 為 玉 可 亜

れち橋や天下蒸平、壺の堤  
うつかりと、眼を拭ふころ、お家  
果もあまのや、や松の流し、糸  
了のりも月あり、おや雪、お家よ  
築山へ、流す抄取り、牡、若  
おふきや、おふあけ、さる、屋茶、おね  
老の兒、おあつて、さうれ、口のきめ  
魚書一の件、おふあつて、田、お  
長宗、さや、湖水の船、お小解、とる

杭 川 其 友 其 科 風 子 如 雪 燕 茶 龍 口 湖 舟 征 舟

掃除早て人もふりけぬ橋本が  
水舟の廻て静ふ時ふりり  
只不備なくぬほそや余り苗  
人の守もつとひらき一様が  
露もそのあまに月あり桐一葉  
むいふ早の送るやまま梅の葉  
涼一さや水のあはのうけくき  
汲こある玉瓶の中や露榎  
管ひつあふまや朝の露を

閑か  
燕亭  
碎月  
龍海  
擔壘  
片履  
湖月  
法湖  
一苔

廿三

葉橋や唐くのころ葉屋の流  
ふとこゝろの異も汲こり柳の海  
舟もふつきて大橋ふ踊あね  
碑もふみりくらやまきか  
秋鶴の天の石ひく相音のね  
舟のこゝろにんくぬほり茶  
水打て空まつ友の月あふね  
茶ふまあて路口うさをとまきりり  
山茶花の咲や米搦く詞の音

春山  
笑顔  
雪海  
花莊  
一翠  
芳雨  
志喜兵  
明且  
弓月

戸を締る暮る言ふ花の夕  
肉とねあつらひ向の遠き一  
人よせ水子と水の蒸しゆ那  
角立ともあつらひさうね茶んが  
勢の菓やめとは射山といふま  
空より下踏をさるあつらひの骨

追加

下酒付

松多をさぬるつ烟下啼一  
中延るやうふを地や枕の酒  
仙堂

草の戸の極の中より野茶が  
菓の茶や眼張ふいふ一の山  
おのおの茶うつ更了種返了

山地

平作

耕 兩  
其 甚  
露 氣

廿四

信濃

俾ふぬさかりつぬつむさの事  
其らうりかそれと目一ぬさか  
ほる香や仰せつてきぬ茶のや  
片時しる夫さぬるふの時雨の神

其 残  
希 心  
看 我  
令 極

赤い草とともくしりしてゆめ時を  
 帯盤まきりしはもうしやねの糸  
 目のまきね招ふとまきりね屋糸  
 ねてね名のえね屋のまきね

信濃國江詠郡中詠訪所登紀者

めとかーや様とあけてねる坂  
 さーて海葉津のまきね時を  
 ねてね屋まきりね屋のまきね

いしよのまきりね屋のまきね  
 ねてね屋まきりね屋のまきね  
 まきりね屋まきりね屋のまきね  
 まきりね屋まきりね屋のまきね  
 まきりね屋まきりね屋のまきね  
 まきりね屋まきりね屋のまきね  
 まきりね屋まきりね屋のまきね  
 まきりね屋まきりね屋のまきね

明治廿八年四月

家田梅庵書

東京在研

信國蘇次郎刻



